

(トマト葉かび病の発生生態と防除)

(農業試験場 研究員 南方千景)

【要約】

日高地域のミニトマト栽培施設において、定植期の資材消毒の実施や、栽培初期の9月～10月にかけてペンコゼブフロアブル、ダコニール1000、ベルコート水和剤を用いた3週間間隔の予防散布の実施が葉かび病の防除に有効であった。

【背景・ねらい】

ミニトマトの産地である日高地域では、葉かび病（図1）の発生が問題となっている。そこで、本試験では産地における葉かび病分生子の飛散開始時期や資材への残存を調査するとともに、葉かび病の防除に有効な薬剤を選定し、防除体系を検討した。



図1 葉かび病病葉

【成果の内容・特徴】

1. 印南町のミニトマト栽培施設では 2022 年作では 10 月中旬から、2023 年作では 8 月下旬から分生子の飛散が認められた（表 1）。栽培初期の 9 月～10 月には発病リスクが高まっていたものと考えられた。
2. 印南町・みなべ町のミニトマト栽培施設では、定植期に分生子の資材への付着が認められた。トリフミンジェットやイチバン乳剤による資材消毒を実施することにより、資材に付着した分生子の発芽率が低下し、栽培初期における葉かび病の発病が抑制された。
3. 日高地域で採取された葉かび病菌に対して、トップジン M、アフエットフロアブル、カンタスドライフロアブル、トリフミン水和剤、アミスター20 フロアブルの効果が低かった。ポット試験ではペンコゼブフロアブル、ダコニール 1000、ベルコート水和剤が葉かび病に有効であり、残効期間は 3 週間程度であった。ミニトマト栽培初期から上記有効薬剤 3 剤のローテーション散布を実施したところ、慣行薬剤（アフエットフロアブル、シグナム WDG、カンタスドライフロアブル）のローテーション散布よりも葉かび病の発病を低く抑えた（図 2）。
4. 栽培中期以降の薬剤散布では、ポット試験で効果が認められたシグナム WDG、トリフミン水和剤、ケンジャフロアブル、ファンタジスタ顆粒水和剤などの使用が望ましい。

表 1 ミニトマト栽培施設における葉かび病菌分生子の飛散と発病状況

前作終了時 発病率	2022年										2023年		
	8/29	9/13	9/26	10/17	10/31	11/16	12/1	12/14	12/27	1/18	2/1		
6%	施設1 DNAの検出	内)	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	発病	外)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
6%	施設2 DNAの検出	内)	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	発病	外)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
96%	施設3 DNAの検出	内)	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	発病	外)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
100%	施設4 DNAの検出	内)	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	発病	外)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
0%	施設1 DNAの検出	内)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	発病	外)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
38%	施設2 DNAの検出	内)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	発病	外)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
80%	施設3 DNAの検出	内)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	発病	外)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
76%	施設4 DNAの検出	内)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	発病	外)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

- 検出無、+ 検出有、x 発病無、○ 発病有
1) 内) 栽培施設内 外) 栽培施設の外側
2) 調査なし

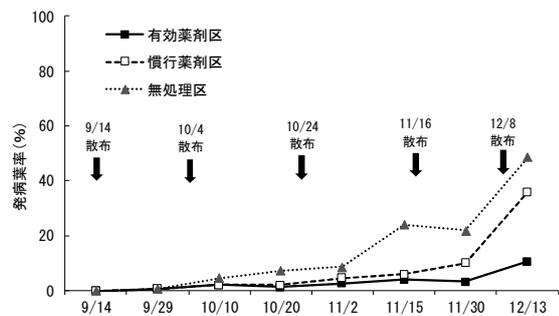


図2 異なる薬剤のローテーション散布が葉かび病発病率へ及ぼす影響